

「第5回横幹連合シンポジウム」が、2014年11月29日(土)～30日(日)に、東京大学 本郷キャンパスで開催された。主催は、横幹連合。「コト」づくり(※)についての発展と振興をめざして、文理にまたがる学会が2003年に大同団結をした学会の連合組織である。「横幹連合」の正式名称は、特定非営利活動法人「横断型基幹科学技術研究団体連合」という。(※この「コト」づくりとは、社会ニーズに沿って多様な「モノ」どうしの関係を俯瞰的な「横断型基幹科学」として提起し、その新たな科学技術による価値創造を社会実装するためのプロセスを指す。)

今回のシンポジウムのテーマである「日本発：モノ・コト・文化の新結合」に関して、実行委員長の六川修一氏(東京大学/日本リモートセンシング学会)は、次のようなエピソードを聴講者に披露した。それは、欧州を六川氏が旅行中のこと、移動に利用した寝台車が一つの空間を多様に利用していて非常に使いやすく、機能的で、とても素晴らしくできている事に、六川氏はたいへん感銘を受けたのだという。そこで、車掌にその気持ちを伝えたところ、車掌が、にこりと笑って一言。「日本製です。」このとき、六川氏は、日本では当たり前の「茶の間」という一つの空間が、応接間や寝室などの多くの目的に活用されていることに改めて気付かされたのだという。

このように、我々の視点を意識的に外に置くという操作によって、日本の日常文化・生活様式には外国とは異なる特色・工夫のあったことが改めて発見できる場合がある。あるいはまた、外国から指摘されて、日本の有する科学技術基盤の良さに気が付く事もあるだろう。だとすれば、そんな環境から生まれた、わが国の特色ある要素技術や研究成果を、意識的に、コトづくりに展開できる「日本発の力」として世界に発信することができるのではないか。六川氏は、今回のシンポジウムのテーマである「日本発：モノ・コト・文化の新結合」を、このような挿話によつて的確に紹介した。

ところで、今回のシンポジウムでは初めての試みとして、異なる学会からの推薦講演どうしを一つのセッションに配置する「学会融合セッション」が行われた。「学会融合セッション(1)」では、経営情報学会、スケジューリング学会、システム制御情報学会、計測自動制御学会の4学会が参加して、活発な討議が行われた。ここでは「ハザードマップの情報品質」などの話題が提供され、横幹参加学会が文理融合的な研究を続けることに期待が寄せられた。日本バーチャルリアリティ学会と日本リモートセンシング学会が参加した「学会融合セッション(2)」では、「触覚インターフェイス」「リモートセンシング・データの北極海航路での活用」などが楽しく紹介され、参加者からは、今後も幅広い分野の学会との意見交換を行ないたいという希望が多く聞かれた。この他に「特別企画セッション(人工物工学の将来展開について)」「オーガナイズドセッション」「一般セッション」の合計17セッション、73件の講演が行なわれ、2日間で148名の参加者があった。

「オーガナイズドセッション」においても、文理の学会の垣根を越える活発な議論が行われた。一例として『『カワイイ』文化は新技術・新産業を創出するか』というセッションでは、昨年度の「木村賞」(横幹科学技術の発展に寄与する優れた研究に与えられる)を受賞した大倉典子氏(芝浦工業大学)が、感性工学の手法を用いて「感性価値としての『かわいい』」を、日本やインドでの聞き取り調査を通じて詳細に論じた。遠藤薫氏(学習院大学)は、「可愛い」は「可哀そう」にポジティブな哀しみの美学を見出したものであることを指摘し、興福寺の阿修羅像や、伏見稲荷大社みやげの神狐の人形、竹久夢二の作品などを例に、日本における通時的な「可愛い」の系譜を紹介した。出口弘氏(東京工業大学)は「日常性の再構築のメディア」として異類婚姻譚の漫画(神々や人でないものとの共生の日常を描いた漫画)などを豊富な事例をもとに論じて、2000年以降に非常に顕著に、異類婚姻譚の結末がすべてハッピーエンドになっているという注目すべき傾向を指摘した。日本発のこうした漫画が、海外でCool Japanとして翻訳・出版されることで、外国発の絶対神や唯一神といった「大きな物語」は希薄化されるのだという。これは、おそらく人類が「神」という大きな物語に頼る時代の終焉の始まりを意味しており、つまり、日本的なシンクレティズム(神仏混淆)が、海外の極めて原理主義的な先鋭化する宗教を相対化させる可能性がある、ということ出口氏は指摘した。

このような、通常の単一の学会大会では決して一つのセッションの中で出会う事のない多様な視点からの話題提供は、すべてのセッションで行なわれ、学会の壁を超えた熱い議論が展開された。文系と理系で使用する「言葉の違い」などに配慮して、登壇者が説明図やモデルなどの発表形式を分かり易く工夫する講演も、多く見られた。

さて、今回のシンポジウムでは、基調講演として、興味深い「日本の国際協力」についての田中明彦氏(国際協力機構 JICA 理事長)の講演を聞くことができた。日本は1954年以来、日本ブランドともいえるべき特色ある国際協力を行っており、高度なインフラ技術や日本型のマネジメント技術を生かした人材育成に力をいれている。これからも「人間どうしの相互理解による安全保障」を、ODAは担い続けるのだという。

そして、全セッションが終了した後、パネルディスカッションが行なわれ、その後の全オーガナイザー・司会者が登壇する「セッション報告」で全体が締めくくられた。パネルディスカッションでは、行政、産業界、学術界の識者から、「例えば、シャワートイレの普及、電車の定時運行、駅のバリアフリー化といった日本で普及した独自の文化については、逆ガラパゴス化という発想でこれらを世界へ輸出することができる」「日本の技術者には、自分が持っている技術が世界に対してどのような恩恵をもたらすか、という視点・発想が求められる」などの意見が出されていた。特に、横幹技術を身につけた人材の育成が重要である点も強調されている。ちなみに、紙面の都合でここに記せなかった全セッションの報告が、「第5回横幹連合総合シンポジウム開催報告」としてまとめられ、2015年4月刊行の会誌「横幹」第9巻第1号に掲載されている。是非、ご参照頂きたい。

次回の「第6回横幹連合コンファレンス」は、2015年12月5日(土)～6日(日)に名古屋工業大学で行われる。その詳細は、横幹連合ホームページ <http://www.trafst.jp/> に、適宜公開される予定である。